

本の集積の時空間に思いをはせて



石田 淳 教授（駒場図書館長）

大学院総合文化研究科 国際社会科学専攻

本にまつわる逸話に事かいては大学とは言えません。20年ほど前の昔話ですが、学内の盗難事件をめぐって、次のような雑談をしたことがありました。

「研究室と知って侵入するような泥棒はそれなりに目利きだから、価値のある古書だけを持って行くようですね」とAさん。これに対してBさんが、「〇〇先生の研究室にも泥棒が入ろうとして廊下側のガラス窓を割ったことがあったと聞きました。ただ、〇〇先生の研究室は書架だけでは本が収まりきらずに、ガラス窓の内側にも分厚い本がびっしりぎっしり堆積していたから、その泥棒もついに侵入をあきらめたいらしいです」と返しました。その場は笑いに包まれつつも、一同この逸話に妙に「さすがだ」と感心し、ここで話を終えるのも悔しいとばかりに、「さすがなのは、難攻不落の研究室を築いた〇〇先生か、それとも突貫作業も途中でいさぎよく立ち去った泥棒か」と話は尽きない、という具合でした。

ここで《本の集積の時空間》としてキャンパスの歴史を頭の中で視覚化してみてください。教員の私物図書の詰まった個人研究室を別にすると、本の集積地こそ、学科等の図書室、研究科・研究所等の部局図書館、そしてキャンパスごとの拠点図書館です。駒場キャンパスにおける本の集積は、新制東京大学教養学部の設置（1949年）以前にさかのぼります。1935年に旧制第一高等学校（弥生）と東京帝国大学農学部（駒場）との間で敷地交換がなされ、同年に一高図書館（現在の駒場博物館）が竣工されて以来、キャンパス内の蔵書の総量は増加の一途をたどるとともに、その所在分布はダイナミックな変化をとげてきました¹。一高時代は、教官（当時）の利用する図書も含めてすべて図書館に収蔵されていましたが、教養学部設置を機に、図書の分類にも研究室図書というカテゴリーが生まれ、キャンパス内の研究棟に図書のミニ集積地が出現していったのです。キャンパス内の蔵書の最大集積施設も、1969年までは一高以来の図書館、そして1969年竣工の教養学部図書館、さらに2002年竣工の現在の駒場図書館へと変遷してきました²。

歴史的経緯は、東京大学教養学部編『東京大学駒場スタイル』（東京大学出版会、2019年）や、駒場70年史編集委員会編『駒場の70年』（東京大学出版会、2021年）に譲りますが、教養学部ならびに総合文化研究科の組織再編、施設整備、学術テクノロジー（電子データベース等）刷新など、必要性和可能性の諸要因が、キャンパスにおける図書の収蔵分布をダイナミックに書き換えてきました。こうした歴史の中に、駒場図書館の現在はあります。

1 一高図書室の図書は震災でも戦災でも焼失を免れました（長尾龍一『一高・駒場・図書館：忘れかけたことども』1998年、11頁）。

2 現在の駒場図書館の表札は、当時の駒場図書館長であった竹内信夫名誉教授が揮毫されたものです。



夢見る駒場図書館

石原 あえか 教授 (大学院総合文化研究科図書館長)

大学院総合文化研究科 言語情報科学専攻

大学図書館は、学生・教職員の学習・研究に必要な資料を収集・保存・提供するという重要な役割を担っています。そして近代的な大学の学術コレクションは、特に18世紀のドイツで発展したと言われます。哲学者ライプニッツや劇作家で批評家のレッシングは図書館長経験者ですが、詩人ゲーテも図書館と縁が深く、1797年から亡くなるまでの35年間、ヴァイマル図書館〔現アンナ=アマリア公妃図書館HAAB〕およびイエーナ大学〔現フリードリヒ・シラー大学FSU〕図書館の監督官を務めました¹。イエーナでの仕事ぶりには次のような逸話があります。ゲーテは就任早々、一階に湿気が多く、本が被害に悩まされていると知り、向かいにそびえる市壁を一部壊し、光と風を入れました。ちなみに黴は今も図書館の大敵です。しかも高温多湿な夏の東京では、節電協力で冷房を緩めるだけでも黴が侵入・蔓延する危険が高いのです。さらにゲーテは同図書館に部屋を譲る約束をしながら、なかなか鍵を渡さない医学部の講義室に石工を呼んで穴を開け、開口部から本を搬入してしまいました。晩年、ゲーテはこの荒業を回顧し、「人は困難に直面してはじめてよいことを成し遂げられる」とコメントしています。

中島京子の図書館を主人公とした小説『夢見る帝国図書館』（文藝春秋、2019）でも、「図書館の歴史は金欠の歴史」とされ、財政難と空間不足との闘いは日常茶飯事として描かれます。永井荷風の父・久一郎が館長として奮闘したように、苦境の中で蔵書を増やし、環境を改善するためには、図書館員の皆さんの緻密な戦略と実行力が頼りです。上野の帝国図書館こと現・国際子ども図書館は財政難等の理由で当初計画の3分の1規模で止まりましたが、同様に「駒図（こまと）」も予定の半分の規模で20年前に誕生しました。しかし大学図書館は研究と教育のためのコレクションが真髄です。また雑誌も捨てずに製本し、保管します。堅牢そうに見えて、実は水にも火にも弱く、油断すると虫にも食われる紙の本を守り、次世代に繋ぐのは容易ではありません。その意味で、この20年の節目に、新たに荻生徂徠の寄贈資料をお引き受けできたことを喜ばしく思う一方、もともと計画の半分の収納力しかない駒図は、とうとう飽和状態になります。駒図誕生時からの悲願である二期棟の夢を実現させる努力は、これからも続きます。

2020年からのCOVID-19感染拡大下では、2か月近い臨時閉館を余儀なくされましたが、「いかなる状況下でも、すべての人たちに情報を提供する」という「図書館の自由」を駒図は精一杯守り、情報発信や学生・教員への情報利用支援プログラムを強化しました。来館が難しい方やお子様連れでもご利用いただける方法も考え続けています。

閉館を知らせる子守歌Shannon's Lullabyが流れた後、もしかして駒図の本たちも、彼らがかつて手に取った森鷗外や夏目漱石の噂話をしているのでしょうか。ともあれ20歳になった駒図と、これからもたくさんの夢をかなえていければ嬉しく存じます。

1 以下のゲーテにまつわるエピソードも含めてヴィンフリート・レーシュブルク著、宮原啓子・山本三代子訳『ヨーロッパの歴史的図書館』国文社（1994）を特に参照した。